バングラデシュ・チッタゴンの有価廃棄物回収児童「トカイ」

―そのイメージとリアリティ

三宅博之

●有価廃棄物収集児童＝「トカイ」（Tokai）

バングラデシュの都市の道路上で花や新聞・雑誌を販売する児童をよく見かける。さらに、彼らのような対人サービスではなく、黙々と道路をくまなく歩き回り、有価廃棄物を収集している児童も容易に見つけることができる。ベンガル語には「道路上の浮浪児」との少し侮蔑的な意味合いを込めた「トカイ」という単語があり、有価廃棄物回収児童を指す。しかし、チッタゴンで筆者が行った調査では、彼らが外見的にはそのようなイメージに見えたとしても、内面はかなり異なっていることが判明した。以下では、「トカイ」の実態を紹介したい。

●バングラデシュの「児童労働」の定義

バングラデシュに限らず、大半の開発途上国では児童労働が一般的である。その要因として、貧困、失業、家族手当て支給計画（制度）の欠如、大規模家族、教育の欠如と両親の子育ての放棄、学校と教育による便益に関する意識の欠如、向上心の欠如ゆえに改善が見られない学校、教育と雇用の関係の欠如、伝統的・文化的諸要素、向都移動などがあげられている（参考文献②,pp.23）。

児童労働は、成長過程にある児童の心身の発達を阻害するとして、法的に禁じられている。バングラデシュでは、次のような基準で「児童労働」が法的に禁止の対象とされている。

・一一歳以下の全ての児童。
・一二歳から一四歳までの年齢群においては週労働時間が一四時間以上である場合。
・労働時間が週四三時間を超過した場合。
・危険な職種・産業部門。

以上は危険労働とみなされ、即「児童労働」にあたる（参考文献①p.46）。この定義に従えば、今回、調査を行った有価廃棄物回収児童の大半は禁止の対象となる「児童労働」を行っていることになる。

●チッタゴンでの調査

筆者は二〇〇六年一一月半ばから一二月半ばの一カ月間で有価廃棄物収集児童一二〇人を対象にアンケート・面接調査を行った（就学児童・非就学児童別、男女別）。その調査結果は以下の通りである。

まず、児童労働ということで労働面のみが強調されがちであるが、有価廃棄物回収児童の数多くは学校に通っている。というのも、工場労働者のように決められた労働場所や労働時間に制約を受ける状態とは異なり、有価廃棄物収集労働は自営的な性格を有しており、その結果、労働時間を調整して学校に通うことが可能になっている。

就学児童の場合、平日の労働時間は三～五時間であり、非就学児童の五時間以上とは値にかなりの隔たりがあるが、休日は同程度の時間を働いている。収入は労働時間にほぼ比例している。収集した有価廃棄物は、近くの小規模な中間取引店にてほぼ騙されることなく現金化される。賃金の抑制を至上命題とする工場で働く児童とはかなり条件が異なっている。

河川沿いのゴミ処分場で有価廃棄物回収（筆者撮影）

収入は一日一一～三〇タカが最も多く、四割を占めていた。この額はあくまでも家計補助的な役割しか果たさない額である。ただし、非就学児童の中には一〇〇タカ以上を稼いでいる児童もいて、彼らは立派な稼ぎ頭として家庭の中で位置づけられている。現金は彼らによってほとんど使われることなく、親に渡される。家計の一部を構成していることは確かである。

有価廃棄物を探すという作業を行う際に、時にはガラスの破片や金属片などで負傷したり、感染症などの病気に罹る場合もある。約半数がそのような体験をしている。その場合の治療方法は自らの判断で薬を買い、塗ったり、服用したりすることである。そうせざるを得ない背景には、クリニックでの診察料の高さなどがある。疾病に関する自己診断が正しければ問題はないが、間違っていた場合、いつまでも治癒しない状態が続き、極端な場合は失命にいたることもある。

疾病と並んで児童を困惑させるのは、悪口・嫌がらせ・差別などである。これらの体験は児童に多大な精神的苦痛を与える。女児に比べ、男児のほうが悪口・嫌がらせ・差別を受けた割合が多く、四割に達している。

同時に、彼らは様々な悩みごとを抱えている。特に、家族について悩んでいる児童が多い。家族のことで悩むということは、家族との関係を保持していることを意味し、全く縁を切ってしまい、孤立した状態になっていないことの証明でもある。家族に関する何らかの悩みがある背景には、低所得層の特徴である社会経済的な脆弱性が存在する。というのも、本調査から明らかになったように、親が事故や病気を被りやすい職業に従事しているため、両親もしくは父親不在の家庭が一割以上に上っているからである。父親不在の状態のまま、母親一人で子供を養育していくことは並大抵のことではない。したがって、子供の労働力に期待するのは、ごく自然の成り行きである。

以上の調査結果をもとに、有価廃棄物回収児童の実態をまとめたい。彼らは家族と一緒に暮らし、学校に通いながら、休日は平日以上に働き、収入はきちんと母親に渡すことで家計を助けている。戸外での仕事につきものの、病気になることも覚悟して、悪口・嫌がらせに直面しつつも、個人的には家族の幸福のために、また社会的には廃棄物の減量化やリサイクルのために働いているという特徴が浮き彫りにされたのである。それは「天涯孤独で道路上を徘徊する浮浪児」でなく、また、決して蔑視の眼で見られる存在ではないことを示している。

（みやけ　ひろゆき／北九州市立大学法学部教授）

《参考文献》

① BBS（Bangladesh Bureau of Statistics), *Report on the Working Children in Metropolitan Cities of Bangladesh 2002-2003*, Dhaka: BBS, 2003.

② Srivastava, Sheelu, "Child Labour as a Socio-economic Problem in India: Elimination or Empowerment," in Jain, Mahaveer and Sangeeta Saraswat eds., *Child Labour from Different Perspectives*, New Delhi: Manak Publications PVT.Ltd., 2006.